

遠征

2023.7.20

小学校の頃の話である。もう何年生だったかは忘れてしまったが、自転車に乗れるようになった。この達成感は大きい。数人の友達と自転車で出かけるようになった。こちらは、まだ慣れていないので、転ぶこともある。痛いのだが、そんなことは言ってはられない。おいていかれてしまう。必死である。そうやって、自転車の運転技術を磨いていった。

学年が上がり、行動範囲が広がっていく。学校の決まりでは、自転車で学区の外には行かないこととなっていた。そう言われると、行きたくなる。そもそも私の家が学区の端にあり、学区外に出ないことのほうがむずかしかった。

子どもは集団になると、あまりいいことは考えない。多くの場合、わるい方に思考が働く。例によって、数人で自転車に乗っていた。学区の境界線まで来た。「どうする?」「行くか」となる。ついに掟を破り、自転車隊は野に放たれた。子どもにとっては、大冒険である。まるで、敵地を偵察しているかのようである。

すると、小学生の一団と出会う。向こうは「何だか見慣れない連中だな」という顔で、こちらを見ている。こちらはこちらで「何か話でもあるんですか」と身構える。最初から敵対するから不思議である。縄張り意識なのだろうか。子どもに限らず、人には、このような習性があるように思う。

ついに、誰かが話しかける。意外と話が弾む。いつの間にか、仲良くなっている。帰るときには、「また会おう」となる。これが子どもである。お誘いを受けたので、また学区の外に遠征である。隣の小学校の子どもたちと、一緒に自転車で行動することになり、自転車隊はパワーアップすることになる。

あるとき、調子に乗って、隣の学区を通り越して、さらに先へと自転車隊は進んでいった。もはや、小旅行である。意気揚々と目的地に着いた。大きな自信を得た気分だった。帰りは、スピードアップである。帰りが遅くなると、家の人に何か言われる。「どこに行っていたの?」この質問が困る。本当のことを言うわけにはいかない。

今、思えば、実に狭いエリアの話である。今の時代では、経験できないことだろう。あの頃の小学生だからこそその話である。中学生になってしまえば、同じような行動をとっても、感じ方がまるで違ってくる。

自転車隊による遠征により、多くのことを学んだ。世界が広くなり、自信がついていった。果たして、正しい方法だったかはわからないが。あの頃は、自転車で転ぶと、膝を擦りむいていた。名誉の負傷である。赤チンキが懐かしい。